

1・みんなが帰ってくる

舞台は岡崎家。

古い民家の日本間。二階に下宿人が住んでいる。

部屋の構造のどこかに階段があつて、そこからは下宿人も日本間に出入りできる。

登場人物たちは、部屋の奥の出入り口と、裏の駐車場に車を止めて、裏口から入ってくるができる。

明かりが入ると岡崎富夫が縁側に腰掛けて携帯で電話している。

部屋の奥に村越雅人が所在なげに立っている。

富夫

「ああ、それがまだわからないんだよね。危篤つてだけで。え？ああ、たぶんダメなんじゃねえかな。もう入院して長いし。限界だろ。うん、とりあえず決まったらまた連絡する。いちおう前もカメラ回すわ。通夜からじゃおかししいし。磯野にやらせる。うんうん。」

磯野が裏口から荷物を持って入ってくる。

富夫

「(荷物、適当に置いて、みたいな仕草)構成もこっちで考えておくから。うん、どうせ死ぬまで暇だもん。ハハハ。・・・え？笑っちゃダメ？かもね。でもなんか実感ないんだよねえ、まだ。病院行って顔見たわけじゃないし。え？大丈夫だと思うよ、いちおうテレビマンの端くれだし。冷静にいい絵撮るから。それじゃ、また。俺、繋がらなかったら磯野に。ほいほい、お疲れー。」

富夫、電話を切る。

富夫

「お疲れ。」

磯野

「お疲れさまです。あ、荷物。」

富夫

「いいよ、そこで。あとやるから。」

磯野

「はい。」

村越

「あの？」

富夫

「ん？」

村越

「僕、出かけていいですか？これからバイトなんで。」

富夫 「ああ、ありがとね。」

村越 「それじゃ。」

村越、出て行こうとする。

富夫 「あ、ちよつと待って！これ。」

村越 「え？」

富夫 「お土産。」

村越 「ほあ。」

富夫 「よかったらひとつ。ラスク。」

村越 「すみません。」

富夫 「いってくれて助かったよ。」

村越 「どうも。」

富夫 「じゃね。」

村越、出て行く。

磯野 「……どなたですか？」